

田中牧郎さん

（独立行政法人国立国語研究所 研究員）

病院の言葉をどう分かりやすくするか

病院で日常的に使われている言葉には、患者にとって耳慣れないものが多い。また、よく知られている言葉が、意外な意味で使われている場合もある。国立国語研究所では、そうした言葉から五十七語を選び、分かりやすくする提案をまとめた。提案の狙いを田中さんに聞いた。

「外来語」の後継プロジェクトとして

——そもそも国立国語研究所が、この「病院の言葉」を分かりやすくする提案に取り組むようになったのは、どのようなきっかけからですか？

「病院の言葉」の前に、国語研究所では二〇〇二年から四年間にわたって「外来語 言い換え提案」というプロジェクトを進めてきました。中央省庁の白書から市町村が発行する広報誌といったところまで、オンラインアンスとかガバナンスとかのカタカナ語があ

ふれていた時代です。こうした公共性の高い場で使われる難解な用語を分かりやすくしていこうという趣旨で、どんな外来語が分かりにくいのかを調査したり、具体的に言い換え例を提案したりして、大きな反響を呼びました。

このときの調査で明らかになったのが、八割を超える国民が、医師が患者に説明するときに使う言葉をもっと分かりやすくしてほしいと考えている、という事実です。これからの医療は、患者に的確な情報が伝わり、患者自身が適切な治療法を選択できることが望まれます。そこで「外来語」のあと、次に取り組むべき

テーマとして「病院の言葉」をやることになりました。
——同様の例として、たしか「法廷用語の日常化」にも関係していましたね。

あれは、今年から始まる裁判員制度に向けて日弁連が主宰したプロジェクトで、国語研究所はお手伝いしただけなんです。弁護士の世界も医師の世界と同様に、明治期に翻訳された専門語がいまも多く使われていた



●たなか・まきろう 一九六二年島根県生まれ。東北大学大学院博士課程単位取得退学後、大学教員などを経て九六年から国立国語研究所に所属。現在は研究開発部言語問題グループ長。専門は語彙論・日本語史だが、コーパスの開発や外来語の言い換え提案にも取り組む。共著に「分かりやすく伝える 外来語言い換え手引」など。

り、たしかに両者は似ている点が少なくないですね。私が参加した時点では、取り上げる言葉の選択などもほぼ終わっていました。言葉の研究者の立場から、どんな言葉が分かりにくいのか、なぜ分かりにくいのかを指摘したりしました。

——「病院の言葉」では、まずプロジェクトメンバーの人選が大変だったのではないですか？

「外来語」や「法廷用語」をやって身に染みしたのは、難しい言葉を使う側の人たち、つまり役人や法律家が意識改革をしてくれないければ問題は解決しないということでした。

そのため「病院の言葉」でも医療の専門家と共同作業をしたと最初から考えていましたが、偶然にも国語研究所のなかで、敬語や方言が診療の現場でどう活かせるかを研究している者がいたんです。そこで、まずその研究者の人的ネットワークを利用して、この方面に関心がある方々に声をかけていきました。

そのうちに、私たちが発表会をやったり、インターネット上にある会員制の医療関係者向け情報サイトで討論したりしていると、横からそれを見ていたお医者さんが何人か、議論に加わってくださるようになりま